

平成26年度研究協議会資料

都道府県・指定都市番号	1	都道府県・指定都市名	北海道	研究課題番号・校種名	2 中学校
				教科名	音楽
研究課題	○音楽的な感受を支えとして、「A 表現」領域と「B 鑑賞」領域の関連を図り、音楽の特性に即した思考力・判断力・表現力を育成する主体的・創造的な学習を実現する指導方法等の研究 (ア)「A 表現」領域(3)創作の学習を含むもの				
ふりがな 学校名 (生徒数)	ほっかいどうきょういくだいがくふぞくきつぽろちゅうがっこう 北海道教育大学附属札幌中学校 (359人)				
所在地 (電話番号)	北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1-11 (011-778-0481)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="http://www.hue-fs.j.ed.jp/">http://www.hue-fs.j.ed.jp/</a>				
研究のキーワード	作曲家・演奏者・鑑賞者、音楽と関わる視点、タブレット型端末の活用				
研究成果のポイント	音楽と関わる視点を「作曲家」「演奏者」「鑑賞者」として生徒個人の音楽と関わる視点を変化させたり、視点を意識して意見交換を行ったりすることで、分野及び領域同士の学習内容の関連を図ることができ、音楽の特性に即した思考力・判断力・表現力を活性化させることができる。また、タブレット型端末を活用することで、記譜力・読譜力・演奏技能不足を補い、音楽的な感受を引き出し、広げることができる。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

「学びの主体者」となる生徒の育成を目指した「問い」を活かす授業の探究 ～創作の授業における思考力・判断力・表現力の育成を目指して～
--

(2) 研究主題設定の理由

本校では、自らの思考・判断をもとに、自他に働きかけ、他者との関わりを通して、自分自身を客観的に捉え、自己の成長に向かうことができる生徒の姿を「学びの主体者」となる生徒の姿と設定し、その育成を目指した実践研究を行っている。研究仮説を生徒自らが「問い」を生み、「問う」ことの価値を実感する学び合い、すなわち「問い」を活かす授業によって、「学びの主体者」となる生徒を育成することができるとした。

音楽科においては、創作の授業における思考力・判断力・表現力の育成を目指してという主題を設定した。「A表現」領域(3)創作の授業では、従来、創作した音楽を生徒自身が演奏して発表するという自作自演を前提にした題材構成・授業形態が一般的であるため、自分の創作した音楽を客観的に見つけ音楽的に吟味する場面が指導過程に設定されていない場合が多かった。イメージ通りに楽譜を記すことができないという記譜力不足の問題や、楽譜に記せたとしても演奏で再現できないという演奏技能不足の問題が内包されている。また、創作者の心情的な思いや意図ばかりが強調されることによって、音楽そのものの創意工夫や新たなアイデアへの関心が薄くなり、他の生徒がつくった音楽のよさを発見しにくい状況を作り出していた。

このような問題意識から本研究では、創作した音楽を客観的に見つけ自己の音楽的思考を振り返る過程を設定した授業づくりについて、自分や他者の創作した作品を振り返って、そのよさや問題点を見出し、工夫・改善の方法を探ることを視点とし、「問い」を活かす授業を探求していく。自分の創作したものに工夫・改善を加えたり、さらには他者の創作した音楽の構造を読み取りよさを発見したりすることを促すことは、同時に“なぜ仲間はこの音を使ったのか”“よりおもしろい旋

律をつくるにはどうしたらいいか”という「問い」を生むことであり、それを他者に「問う」ことで、音楽的思考が深まっていく。中学校音楽科において研究が求められている「音楽の特性に即した思考力・判断力・表現力の育成」は、「問い」を活かす授業を通して達成されると考える。

### (3) 研究体制

- ・本校全教員出席による会議での研究協議（週1回）、本校研究部との連携
- ・本学音楽科教員との連携（指導案検討、授業参観等）

### (4) 1年間の主な取組

平成 26 年 度	5月	重点項目①に関わる予備実践：第1～3学年・A表現(1)歌唱
	6月	重点項目②に関わる予備実践：第2学年・B鑑賞
	7月	教育研究大会（本校主催）公開授業・研究協議：第3学年・A表現(3)創作
	8月	研究成果の発信① ：日本デジタル教科書学会研究発表，北海道教育大学研究紀要(教育科学編)掲載
	10月	研究成果の発信②：日本教科教育学会研究発表，日本音楽教育学会研究発表
	11月	重点項目③に関わる予備実践：第1学年・A表現(3)創作
	12月	公開学習会（本校主催）公開授業・研究協議：第2学年・A表現(3)創作
	2月	研究成果の発信③：教育課程研究指定校事業・研究協議会

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 研究内容

重点項目①授業形態を工夫し、音楽を捉える視点を意識的に変化させる

- ・「作曲者」「演奏者」「鑑賞者」の各視点で音楽と関わる
- ・音楽を捉える視点を明らかにしながら、同じ立場あるいは異なる立場で他者と意見交換をする

重点項目②「A表現」領域と「B鑑賞」領域との関連を図る

- ・重点項目①「鑑賞者」の視点を、創作の授業で活用する
- ・重点項目①「作曲者」「演奏者」の視点を、鑑賞の授業で活用する
- ・創作のアイディアの創出や音楽的思考の深化を促進する参考曲としての鑑賞の在り方を検証する
- ・創作によって深化した音楽的思考を活かす鑑賞の在り方を検証する

重点項目③学習を支援する教具としてタブレット型端末を中心とした機器の教育的可能性を探る

- ・記譜力・読譜力不足，演奏技能不足を補う道具としての可能性を検証する
- ・生徒の音楽的思考を促し，その過程を記録する道具としての可能性を検証する
- ・生徒相互の学び合いや，生徒個人の音楽的思考を促す道具としての可能性を検証する
- ・ワークシートとの併用の方法について検証する

### (2) 具体的な研究活動

**重点項目①に関わる予備実践：第3学年「歌詞と旋律を味わいながら表現の工夫をしよう」ほか**

- ・教材：第3学年「花」，第2学年「浜辺の歌」，第1学年「夏の思い出」
- ・「A表現」領域(1)歌唱の授業に「作曲者」「鑑賞者」の視点を取り入れて楽曲を分析することで、「演奏者」として思いや意図をもち，歌唱表現につなげる

**重点項目②に関わる予備実践：第2学年「様々な反復と変化をとらえて鑑賞しよう」**

- ・教材：「魔法のフルーツバスケット」「クラッピングミュージック」「ピアノフェイズ」
- ・音楽の構造（反復と変化，テクスチュア）に着目して鑑賞したことを，授業実践②に活かす

### 授業実践①：第3学年「主題に合う旋律をつくろう」

- ・教材：「ラヴァースコンチェルト」 ※音楽之友社『中学生の器楽』掲載楽譜を使用
- ・「ラヴァースコンチェルト」の旋律を第1パートとし、テクスチャ・構成・終止感を意識しながら第2パートの単旋律を創作する
- ・「演奏者」＝タブレット型端末とし、「作曲者」「鑑賞者」の異なる立場で意見交換をしたり、「鑑賞者」が「作曲者」となりアイデアを提供したりする（重点項目①）
- ・タブレット型端末の生徒相互の学び合いや、生徒個人の音楽的思考を促す道具としての可能性を明らかにする（重点項目③）

### 重点項目③に関わる予備実践：第1学年「音の高さとリズムを変化させて旋律をつくろう」

- ・教材：「カノン1」 ※音楽之友社『中学生の器楽』掲載楽譜を使用
- ・もとのメロディーである「カノン1」の音の高さやリズムを変化させて単旋律を創作する
- ・ワークシートとの併用の方法の見直し、タブレット型端末やアプリケーションソフトに関わる問題を再度整理し対策を考える

### 授業実践②：第2学年「モチーフを変化させて旋律をつくろう」

- ・4分の4拍子・1小節のモチーフを創作し、8小節反復させたものを聴くところからアイデアを広げ、8～16小節で単旋律を創作する
- ・「演奏者」の役割をタブレット型端末に任せ、「作曲者」「鑑賞者」の異なる立場で意見交換をする（重点項目①）
- ・予備実践①のアイデアを旋律創作に用いる、「B鑑賞」領域の題材「音楽の構造を理解して聴き、管弦楽の響きを味わおう」（教材：「交響曲第5番ハ短調」）との関連を図る（重点項目②）

## 3 研究の成果と課題

### (1) 成果

重点項目①②について、音楽と関わる視点を「作曲者」「演奏者」「鑑賞者」として生徒個人の音楽と関わる視点を変化させたり、視点を意識して意見交換を行ったりすることで、分野及び領域同士の学習内容の関連を図ることができ、音楽の特性に即した思考力・判断力・表現力を活性化させることができる。

- 成果①視点を変えて音楽と関わることで、生徒個人の学びを深める効果があった
  - ・歌唱においては、「作曲者」「鑑賞者」の視点を取り入れて楽曲分析を行いながらも題材を通して「演奏者」の視点で考えを蓄積したことで、生徒自身が学びの深まりを感じることができていた。
  - ・イメージから音楽を創ること（「作曲者」の視点）と音楽からイメージを感じ取ること（「鑑賞者」の視点）を行き来することで音楽的思考が活性化し、自分の創作したものを言葉で説明できるようになったり、仲間の創作したものを言葉で評価できるようになったりするという成果があった。
- 成果②意見交換を通して、自分とは異なる聴き方・感じ方・表現の仕方に気付くことができた
  - ・創作においては、視点を変えて自分の作品を客観視できることから、他の作曲者・鑑賞者のアイデアを積極的に取り入れたり、新しい音楽との出会いに素直に反応したりする姿が見られた。
  - ・自分の作品が解釈されたり評価されたりする場に立ち会う経験において、作曲の意図が鑑賞者に伝わったり、演奏してもらったりすることから創作した作品に対する自信が生まれていた
- 成果③学習内容の整理と関連
  - ・3つの視点を意識して指導することで、学習内容と指導事項、評価の観点を整理できた。
  - ・創作の授業で仲間の作品を聴く際「鑑賞者」として体験した思考がそのまま鑑賞の授業に活かされることにより、表現領域と鑑賞領域をつなぐばかりではなく、鑑賞曲に対して「私と同じ工夫

をモーツァルトもしていた」というように親しみがわくようである。

重点項目③について、タブレット型端末を活用することで、記譜力・読譜力・演奏技能不足を補い、音楽的な感受を引き出し、広げることができる。

○成果①生徒の記譜力・読譜力・演奏技能不足を補う効果がある

- ・「演奏者」の役割をタブレット型端末に任せることにより、生徒の演奏技能不足を補う効果がある。また、記譜や読譜が苦手な生徒も、再生機能を活用することにより、自分のイメージと音、記譜されたものと音とを照らし合わせながら創作することができる。

○成果②生徒の学習意欲を高める効果がある

- ・実践後に行った授業アンケートでは、楽しく進んで学習できるという項目への肯定的な回答が特に多かった。その理由としては、成果①のように自分の技能不足を補うものであったことに加え、創作の方法そのものを見出していくことから、「自分にもつくり出すことができた」と実感する生徒が多かったことも特長といえるだろう。

○成果③自他の作品を客観的に見つけ、音楽的な感受を引き出す力を育成する可能性がある

- ・「演奏者」の役割をタブレット型端末に任せることにより、生徒は「作曲者」と「鑑賞者」の役割を行き来しながら創作をする。その結果、仲間の作品を自分が創作したときに体験した思考で読み解くことができ、感じたことを具体的に伝えることができていた。

○成果④生徒の創作のアイデアを広げ、多種多様な音楽を受け入れ、新たな音楽世界を考える力を育成する可能性がある

- ・実際のピアノの演奏では表現することが難しい大きな跳躍進行やリズムパターンの使用など、タブレット型端末だからこそ容易に表現できる音楽を受け入れ、楽しんでいる様子が見られた。

## (2) 課題

- ・「作曲者」「演奏者」「鑑賞者」の視点を行き来することは音楽的な思考を深める効果があったが、「作詞者」の視点では、思考対象が音楽外の要素（歌詞）に行ってしまうので、音楽的思考が深まらなかったと推測された。どの題材・教材に、どの視点で関わるのかについては、検討が必要である。また、音楽を捉える視点や思考の流れを意識した年間指導計画の見直しも行いたい。
- ・タブレット型端末やアプリケーションソフトの活用は、記譜力・読譜力不足を補うものであったが、記譜力・読譜力が身に付いたということではないことが分かった（定期テストで楽譜のみで考えるよう指示すると、音から容易に読み取ることができていたことができなくなる生徒が多かったため）。また、生徒のアンケートからも楽譜を手で書かないことへの不安が大きい。ワークシートとの併用や記録の方法という点でも、課題が残った。

## (3) 指定期間終了後の取組

○「作曲者」「演奏者」「鑑賞者」の視点で音楽を捉える

音楽と関わる視点を「作曲者」「演奏者」「鑑賞者」に切り離すことで、学習内容や指導事項を整理することに重点を置いていたが、さらにそれぞれの視点を行き来したり重ねたりすることに重点を置いて、思考力・判断力・表現力の高まりをねらいたい。また、歌唱・器楽・鑑賞の授業においても3つの視点を取り入れて学習することによって、分野及び領域同士の関連を強めていきたい。

○音楽的な感受を支えとした、音と言葉によるコミュニケーションの充実

従来の音楽学習においては、音楽外のイメージや思いに関わる言葉ばかりが優先され、イメージと実際の音楽との関連性が薄れ、表現に活かすことができないという問題点がある。音と言葉によるコミュニケーションを充実させることで、生徒の音楽に対する価値意識を広げていきたい。